

とらうべ

わからないこと

佐藤愛子

作家

この頃はハナタレ小僧がいなくなったが、私の子供の頃(昭和初期)はハナタレ小僧全盛期で、ハナタレ小僧即ち腕白小僧という趣だった。腕白小僧は洩を拭くために常に洋服の袖がテカテカと光っていて、必ず棒切を握っていた。女の子を見ると餌を見つけたライオンみたいにノソノソ近づいて来て、いきなり「通せんぼ」をしたり棒切をかざして追いかけて来たりした。その頃私の親友にキヨちゃんという女の子がいたが、彼女は腕白、ハナタレに立ち向かう唯一の女の子で、「なにをーっ!」と立ち止まって睨みつけると、腕白は尻込みしてどこかへ行ってしまった。このキヨちゃんも「ハナタレ娘」でいつも水洩を鼻の下にこびりつけていた。そんな私にとって「ハナタレ」は強さの象徴だったのである。



ハナタレ小僧がいなくなったのは、子供の栄養状態がよくなったことや、抗生物質の普及のためだろうことは医学にうとい私にも見当がつく。だがある時、アレルギーについての本を読んでいると、昔はアオ洩、水洩がアレルギーの原因となる花粉を流し去っていたので、アレルギーが抑えられていたという説がある、と書いてありびっくりした。そういえば花粉症に悩みながら棒切をふり廻しているハナタレ小僧なんていなかった。また、昔の子供の腸にはたいい蛔虫がいたが、蛔虫が絶滅させられたこともアレルギーの増加のひとつの原因だと書いてあってまたびっくりした。

私はつくづく考え込んでしまう。

いったい進歩とは何なのだろう? 読んで字の如く「進み歩むこと」と広辞苑にある。

「物事の漸次に発達すること。物事が次第によい方、また望ましい方へ進みゆくこと。」

我々は驚くばかりの進歩の中に身を置いている。だがハナタレ小僧の代わりに花粉症やアトピー性皮膚炎に苦しむ子供たちが現われたことを果たして「進歩」というべきなのだろうか?

我々の暮らしは便利になった。快適になった。長命になった。すべて科学の進歩のおかげである。だが柳田国男はかつてこういったそうである。

「進歩という言葉は『幸福の増進』という言葉につながらなければならない」と。

私は全く同感する。そして思う。だが「幸福の増進」の「幸福」とはど

ういう幸福なのだろう、と。進歩を考える前に幸福とは何かについて考えなければならない時代になってきている。

昔の日本にはあまりに苦しいことが沢山あった。そこから逃れる「進歩」を我々は望んだ。だが今、「進歩」は我々の暮しから苦痛や絶望を取り去ってくれたであろうか。別の形の苦痛や不安や絶望が現れただけではないのか?

いったい我々は何を旨ざしてどこへ行こうとしているのだろうか? 私にはわからない。ほんやりわかることは棒切を振り廻していたハナタレ小僧は、それほど「不幸」ではなかったのではないかということくらいである。